

「千唐流の歴史」

— History of Chito-ryu Karat —

文責：中山 隆嗣

by Nakayama Takatsugu

1. 千唐流の遠祖、唐手の系譜

千唐流としての歴史は1946年、熊本県菊池郡隈府町に養成館道場が開設されてからになる。開祖は初代、千歳強直翁(1898年～1984年)だ。

だがこれは千唐流として名乗りを上げてからであり、そのルーツは「唐手」に遡る。

「唐手」の初代は知念親雲上(親雲上は役職名)とされ、1688年ころ、中国福建省に渡り、拳法を修業したと言われる。1926年、尚敬王の御附武官となった。

2代目として尚灝王御附武官の松村親雲上(松村宗棍、1809年～1896年、生年没年共に諸説あり)になっているが、その師である佐久川寛賀翁(別号トーディ佐久川、1840年～1920年、生年没年共に諸説あり)が2代目を継ぎ、松村宗棍翁が後継となったという説もある。

そして1816年、3代目として尚育王御附武官の阿波根親方(親方も役職名)、1838年、4代目として外間親雲上、1860年、5代目として新垣世璋翁(1840年～1918年・没年に異説有)、1918年、6代目として千歳強直翁と続き、1984年、7代目として2代目千歳強直宗家(1950年～)へと続く。

なお、明示されていない生年・没年については、諸説があるため、今後の研究が待たれる。

1. The Origin of Chito-ryu: Genealogy of Karate

The history of Chito-ryu began in 1946 when its founder Chitose Tsuyoshi (1898-1984) opened the Yoseikan Dojo in Kikuchi, Kumamoto. The root of Chito-ryu goes back to karate* which is said to have been founded by Chinen Bechin (Bechin was the title for a scholar-official of the Ryukyu Kingdom in Okinawa) who travelled to the Fukken Province in China around 1688 to learn martial arts. He later returned to Okinawa and became a member of the royal guard for King Sho Kei in 1726. The second master of karate was Matsumura Bechin (1809-1896) who was also a member of the royal guard for King Sho Ko. Some historical records suggest that Sakugawa Kanga (1840-1920), the teacher of Matsumura, may have assumed that position before him. The next in line were Awane Wekata (Wekata is a position name), Hokama Bechin, and the widely-known fifth master, Aragaki Seisho (1840-1918). The sixth master was Chitose Tsuyoshi the founder of Chito-ryu.

* Karate here means the “martial arts from the Chinese Ding Dynasty,” pronounced “Tode” in Okinawan, and not “empty hand” as it is usually referred to in Japanese. Some dates in this article need to be confirmed by further study.

2. 千唐流開祖、初代千歳強直翁の修業時代

初代千歳強直翁は1898年10月18日、現在の沖縄県那覇市久茂地に生まれる。

1905年、7歳の頃から新垣世璋翁に師事し、三戦、古流の形、棒術などを学んだ。敏捷で身軽なことからマヤー(猫)新垣とも呼ばれた。新垣翁の師匠のワイシンザン(王心善)は初代ともゆかりのある東恩納寛量翁(1853年～1915年)や松村宗棍翁(1809年～1896年、生年没年共に諸説あり)の師匠でもある。

また、当時棒術の達人と言われていた知念三良翁(1840年～1922年)からは、大城朝恕翁(1888年～1935年)、富名腰義珍翁(1868年～1957年、1870年生まれという説もある)と共に棒術を学ぶ。知念翁の流派は山根流と称されるが、そのルーツは佐久川翁であり、古のつながりが見えてくる。

首里の金城大筑翁(1841年～1926年)は尚泰王の護衛役であり、古武術の大家であった。門下の中に琉球古武術の屋比久猛伝翁(1878年～1941年)がいるが、金城翁からは剣を学んだという。初代の場合、知花朝信翁(1885年～1969年)と共に取手・逮捕術を習得した。

那覇手の東恩納寛量翁にも師事し、サイファ、セーパイ、クルルンファー、テンショウを習得する。東恩納翁は新垣翁の弟子でもあるから、新垣翁から見れば初代とは兄弟弟子になる。ただ、東恩納翁は1876年から1888年ころまで中国で修業している。

初代が東恩納門下になったのは、翁が中国からの帰国後だが、当時、剛柔流開祖宮城長順翁(1888年～1953年)がいた。初代とは10歳違いの宮城翁は先に東恩納翁の門下生になっていたが、1915年には福建省に渡っているの、初代とはその前に共に稽古している。

初代は宮城翁を盟友と語っているが、東恩納翁の下では互いに技の研究に余念がなかったという。剛拳として名高い宮城翁の突きをまともにもらったらたまらないとばかりに受けを、あるいは捌きを研究するといった具合だ。もちろん、宮城翁もそれを前提にさらに技を磨くといった感じだったという。

そこまで仲良くなった背景には、初代の入門時のエピソードがある。

当時、東恩納翁は弟子をとる際には厳格で、なかなか入門を認めなかったという。しかし、どうしても入門したい初代は晴れの日も雨の日も日参し、門のところで座っていたという。その様子を見ていた東恩納翁が宮城翁にどういう人物かを調べるように指示し、その話から入門が許可されたという。つまり、初代が東恩納門下として稽古できるようになったのは宮城翁の口添えがあったからであり、そこから急速に親しくなったのだ。このエピソードはいずれの空手道史にも記されていないことであり、今回初めて公開する。

初代は本部流の本部朝勇翁(1867年～1930年)にも師事している。そこではウンスー、ワンスーを伝授された。本部翁の門下生だった上原清吉翁(1904年～2004年)と初代は本部門下としての先輩・後輩という関係もあり、親交があった。上原翁などが中心になって結成された沖縄古武道協会(後の全沖縄空手古武道連合会)の会合では上原翁の他、数名の先生との記念写真も残っている。

上原翁に初代のことを尋ねると、「大きい男だった」という言葉がよく出てきたが、体格的に差はない。武人ゆえに感じる感覚だったのかもしれない。

チャンミーグァーとして知られている喜屋武朝徳翁(1870年～1945年、生年に異説有)にも師事し、チントウ、クーサンクーを学び、バッサイ、アーナンコーは新垣安吉翁(1899年～1929年)と共に喜屋武翁から学ぶ。一部の空手史の本の中に、初代の師として安吉翁の名前が記されているケースがあるが、それは間違いである。安吉翁と初代との出会いは守礼の門での掛け試しだった。そのつながりから安吉翁は喜屋武翁の下で学んだことになる。

初代の師の一人、本部翁が糸洲安恒翁(1930年～1914年、生年没年共に諸説あり)の門下生時代、同期だった花城長茂翁(1869年～1945年)にも師事し、翁が得意形としていたジオンを習得した。

古武道・武器術について、初代が残されている資料には真栄里翁、湖城翁と記されているが、当時の状況から考えると真栄里蘭芳翁(1838年～1904年)、湖城嘉宝翁(1849年～1925年)と推定される。初代はこの2人の先生から剣、ヌンチャク、トンファー、權を習得した。



2. The Martial Arts Training of the Chito-ryu Founding Master

Chitose Tsuyoshi was born on October 18, 1898 in Naha, Okinawa. In 1905 he began training at the age of seven under Aragaki Seisho and learned Sanchin, traditional Okinawan katas, and bojutsu. Aragaki was called Mayaa (meaning cat in the Okinawan dialect) because he was light and he could move quickly. Aragaki's teacher Wai Shinzan also taught Higaonna Kanryo (1853-1915) and Matsumura Bechin. Chitose also trained under the bojutsu master, Chinen Sanra (1840-1922) who earlier trained under Sakugawa Kanga along with Oshiro Chojo (1888-1935) and Funakoshi Gichin (1865-1957). The above tells us the strong ties between the various strands of Okinawan martial arts. Other influential teachers include the master of Ryukyu kobujutsu, Kinjo Uchiku (1888-1935), a member of the royal guard for King Sho Tai, and Higaonna Kanryo who taught Saifa, Seipai, Kururunfa, and Tensho. Miyagi Chojun (1888-1953), who later founded Goju-ryu, was also a student of Higaonna. Chitose was admitted to Higaonna's dojo because he continued to sit at the main entrance for days on end until Miyagi put in a good word for him, and the two trained together as the keenest of all the students. Chitose also learnt unsu and wansu from Motobu Choyu (1867-1930) of Motobu-ryu. He met and befriended Uehara Seikichi (1904-2004) who was the driving force for establishing the Association of Okinawan Kobudo. Uehara remembers Chitose as being a large man even though there is no difference in their actual heights. Chitose's imposing martial abilities may have left that impression on others.

Chitose learnt Chinto, Kusanku, Bassai, and Ananku from Kiyan Chotoku (1870-1945). Aragaki Ankichi (1899-1929) was a student there at the same time as Chitose. The two met for the first time at the kakedameshi tournament at the Shurei Gate. Hanagusuku Chomo (1869-1945) taught Chitose Jion. Maesato Ranho (1838-1904) and Kojo Kaho (1849-1925) taught him kobujutsu and bukiijutsu (Nunchyaku, Tonfa, and other weapons).

3. 初代の武術家としての交流

初代は1922年に上京し、医学生になって勉学に励んだ。奇しくもこの年、富名腰義珍翁が上京し、文部省主催の体育博覧会で空手道の紹介を行なった。富名腰翁はそのまま東京で生活することになり、沖縄出身者が住む明正塾に寄宿した。そして自然とそこを中心として空手を教えるようになった。

富名腰翁は約30年、沖縄で教師をしていたが、実は初代の小学校時代の担任だった。そういうご縁もあり、初代も富名腰翁の空手指導の手伝いをされた。その頃、今では各流派の開祖である先生も学びに来られた。和道流開祖大塚博紀先生(1892年～1982年)が1922年から、神道自然流開祖小西康裕先生(1893年～1983年)が1925年から、日本空手協会を設立した中山正敏先生(1913年～1987年)が1932年から富名腰翁から教えを受けている。また、富名腰翁の三男義豪先生(1906年～1945年)の名前がよく見かけますが、初代は長男義英先生(1900年～1961年)の指導もされていた。

初代は東京でいろいろな武道も学ばれたが、剣道では高野佐三郎先生(1862年1950～年)に剣道を学び、当時日本剣道界の双璧と言われた中山博道先生(1872年～1958年)とも親しく交流があった。

柔道も学ばれており、加納治五郎先生(1860年～1938年)の下では兄弟子となる不世出の柔道家三船久蔵先生(1883年～1965年)ともよく乱捕りをされ、初代の蹴りへの対策として懐に板を忍ばせたこともあるというエピソードもある。

3. Outside of Okinawa

Chitose moved to Tokyo in 1922 to study medicine. In the same year, Funakoshi Gichin (Shotokan Karate) did a karate demonstration at a sports exhibition sponsored by the Ministry of Education in Tokyo. Funakoshi remained in Tokyo at Meiseijuku (a lodge for Okinawans) and began teaching karate there. Before that time, Funakoshi was a teacher in Okinawa for thirty years, and was in fact Chitose's first grade elementary school teacher. Meiseijuku became the center for Tokyo martial artists such as Otsuka Hiroki (founder of Wado-ryu, 1892-1982), Konishi Yasuhiro (Shindo Jinen-ryu, 1893-1983), and Nakayama Masatoshi (founder of the Japan Karate Association, 1913-1987). Chitose was an assistant coach and taught Funakoshi's eldest son, Giei (1900-61). During this period, Chitose extended his learning to Kendo under Takano Sasaburo (1862-1950), and was acquainted with Nakayama Hakudo (another Kendo master of the day, 1872-1958). His interest also included Judo and he trained under Kano Jigoro (1860-1938). The Judo master Mifune Kyuzo (1883-1965) was also a student there at the time. He would put a plank of wood under his judogi when he practiced kumite with Chitose.

4. 養成館道場

千唐流としてのスタートは1946年、熊本県菊池郡隈府町に養成館道場を開設したところからになる。ここに多数の若者が集い、千唐流の礎を築いた。

初代は指導の傍ら、故郷沖縄にも思いを馳せた。戦争の激しい戦火に見舞われた故郷の手伝いができればということで1947年、熊本歌舞伎座で空手の演武会が催された。この時、同じく東恩納翁の門下だった東恩流開祖、許田重発先生(1877年～1968年)も参加されている。許田先生については、その師、東恩納翁や剛柔流開祖宮城長順翁との関係から剛柔流と称されることもあったが、師である東恩納翁の名前の一部をいただき、流派名とされている。残されている形にも、剛柔流では行なわない形がある。

千唐流が大きく飛躍するきっかけになったのは、1951年だ。

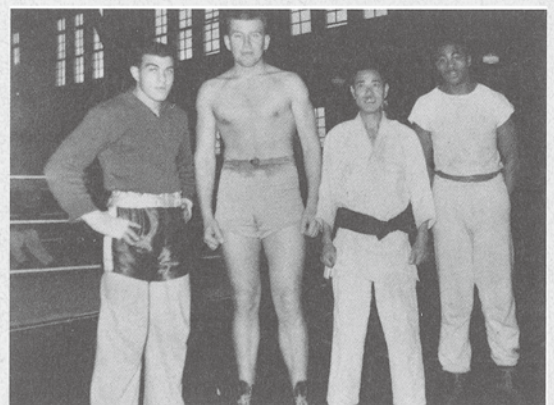
当時はまだ戦後そのままの様相で、進駐軍が駐留していた。生き残った日本兵と米兵のいざこざもしょっちゅうだったようだが、新市街という熊本市内の繁華街で総勢約30人が争っていた。当然、警察もMPも駆けつけるが、あまりの激しさにしばらく収まるまでということで静観していた。

しかし、初代は人に迷惑をかけるとはけしからん、とばかりに単身乱闘の中に割って入り、その騒ぎを鎮めてしまったのだ。

ただ、当時の風潮では進駐軍に手を出すというのは大変な問題であり、初代もすぐにその場を立ち去ったという。

数日後、警察から呼び出しがあった。さすがの初代も恐縮して出頭したとのことだが、待っていたのは署長だけでなく、進駐軍の司令官もいたのだ。そしてその口から出てきた言葉が、武術教官の依頼だった。敗戦国の人間が戦勝国の、しかも軍隊のコーチというのは異例中の異例であり、このような展開は快挙であった。今でこそ各国の軍隊で空手が稽古されることは珍しくないが、初代は進駐軍の兵士を徹底的に鍛え上げ、それが海外普及のきっかけにもなった。

その当時、空手だけでなく柔道や剣道も指導され、また九州各地の部隊でも指導されていた。大分の部隊にヘンリー・スロマンスキー氏がいたが、初代から5段を授けられている。このヘンリー氏は、プレスリーの空手の師匠でもあり、プレスリーのレコードジャケットやプライベート写真にも、千唐流のバッジを付けた様子が写っている。



4. Opening of the Yoseikan Dojo

Chitose founded Chito-ryu in 1946 when he opened the Yoseikan Dojo in Kikuchi, a small town in Kumamoto Prefecture, where a large number of youths gathered to help establish the school of Chito-ryu.

Okinawa, Chitose's homeland, was hit hard in World War II and he was constantly thinking of how he could support the people still living there under such harsh conditions. As a way to raise money, he held a karate demonstration at the Kumamoto Kabuki Theater in 1947.

In 1951 Chito-ryu got an opportunity to expand. During the Allied occupation of Japan immediately following the war, there were many fights between the Allied servicemen and former Japanese soldiers. On one occasion, there were about 30 or so men fighting in Shinshigai, the central shopping district of Kumamoto, and both the police and the MPs could only stand back and wait until it stopped. Chitose went alone into the fighting and stopped it single-handedly. He then quickly left the scene in fear of being charged for physically forcing some of the Allied servicemen to stop fighting. A few days later he was summoned to the police station and was met by the commander of the occupation army, and to his surprise, was asked to teach martial arts to the servicemen at their military base. Chitose, from that point on, taught the Allied servicemen and this became a major turning point for the spread of karate overseas.

Judo and kendo were also introduced to the Occupation Army in Kyushu at the same time. Henry Sromansky, a serviceman stationed in Oita Prefecture, was given the rank of 5th Dan by Chitose. Sromansky later taught Elvis Presley and is in a photo on one of Elvis's records wearing a Chito-ryu badge on his karategi.

5. 世界へ広がる千唐流

時代が落ち着いていくことに合わせ、千唐流も広がっていった。

空手の指導は進駐軍から自衛隊へと移り、空手部所属の部員の転勤や各道場の道場生たちの移転などで全国に道場ができた。現在、定期的に全日本大会をはじめ、東日本大会、西日本大会といったブロック大会も開催されている。

世界に目を向けても、進駐軍の関係や海外への空手道普及に燃えた方々の努力により、海外でも道場ができるようになった。特にカナダの場合、現在の全国組織であるNKAは千唐流がベースを作った。

初代も海外に支部ができると指導に出かけられることが多くなった。北米が中心だったが1962年、1967年、1974年にハワイ、カナダ、アメリカで指導された。現地では大変な歓迎ぶり、演武、パーティー、技術指導など多忙を極めた。

特に1967の時はカナダで行なわれた万博で千唐流がデモンストレーションを行ない、そこに初代は招待された。その関係でテレビ出演、閣僚との面談など、政治家並みのスケジュールだった。

そういう実績がベースになったのか、1970年、大阪で行なわれたアジア初の万博でも千唐流は演武を行なった。武道とは縁のない世界的なイベントで唯一演武を行なったのは特筆すべきことだ。空手界の快挙と言ってもよく、空手道が文化であることを2回の万博で証明したような出来事だった。

